の點については本文の記載に疑を挾むべき餘地あるなし。從つて此の改元以來十二年間大石が葛兒罕の位にありしは疑ふ可らざると共に、大石死沒の一一四三年より、在位年數として擧げらるゝ二十年なるものを逆算すれば、其の位に上りし初めの年はまさに一一二四年即ち甲辰の歲に相當するものなるを知るべく、（此の點については丁謙氏の考がふる所亦同じ）これ余が其の在位年數も年號の數も共に正しきものなりと主張せんとする所以なり。

遼史に載せたる西遼の開國に至る迄の記事の曖昧なること之を上に論じたるが如し。然れども此の曖昧なる點は重に其の年次と記載の順序とに關するものにして、記述せられたる事實については寧ろ正確を傳へたるもの少からず。こゝに論述せる所は、東西史籍に見ゆる所を斟酌して、主として其の年次を按配し、其の西徙の跡を闡明せんとしたるにすぎず。其の他の點に關しては別に之を他日の機會に期せんとす。（大正五年二月稿）

黃河水源問題

理學博士　小川琢治

一

支那の土地及び文化を理會するに最も重要な關係を有するものは河流で、就中黃河楊子江の兩水が亞細亞大陸の大河流であるから、地理上歷史上共に大に注意さるべきものである。支那の古代から地理思想の發達し來つた徑路を尋ねて、禹貢といひ、水經といひ、近代の水道提綱といひ、水誌 Hydrography として發達して居るのを見るは決して偶然でなくて、亞弗利加大陸の地理問題の焦點がヘロドトス、プトレメオスプリニウスの頃から

ール河水源に在つて、最近の地理上の探檢が此の疑問の解決と共に河流の脈絡明瞭となつて全く終結を告げたのと其揆を一にして居るのである。支那水系上ニール河に當るものは黃河で、我々は其の水源問題を以て支那に於ける地理的智識の發達史上の試金石と看做すものであるから、其古代から中世の間に次第に發達した概要を茲に述べる。

黃河に關しては獨り水源が歷史地理學上の一問題たるのみでなく、其下流の三角洲を成して海に注ぐ部分が歷史時代の初から現今まで著しい變遷を經た者で、上古から近世迄の中原に起つた大小の事件は此變遷を明瞭に知らねば理會し得られぬのは勿論であるが、是は他日別に述べる積である。

二

黃河は西藏高原の東北隅青海地方から起るもので、小なるS字狀を描いて東北に流れ蘭州に至るまでに、中崑崙高山から流出する諸水と岷山から流出する洮河を容れて水量の多い上流を成して居る。是から第二の大なるS字狀を描いて渤海灣に注ぐ間に、渭水の合流點たる潼關までは中流の北曲部で、其北から南に彎屈する爾根河（歸化城から流出する）の合流點までは殆んど支流として著しいものがない。潼關から山西河南境界の山地に狹い峽谷を東流して、三角洲の大沖積平地に出るまでは其下流の上部で、以下は下部の三角洲平地である。今茲に黃河を記載するに當つて便宜上、その流を蘭州近傍までの水源（上流）、北曲部の西半（北曲河又は北河と呼ぶことにする）、其東半（西河と呼ぶ）の三部に區分し、以下を下流及び河淵の二部に區分する。

黃河の南を限り楊子江との分水界を成す山嶽は嵩、華、嶓冢等の秦嶺山脈と、其西の岷山で、北

河と西河西北の諸支流との分水界を成すは鳥鼠山から東北に走る六盤山（今茲に總稱して隴山と呼ぶ）の山脈である。蘭州の西から上流は崑崙山脈間の横谷に峽谷を成し、水源近傍に至れば山脈に並走する縱谷を流れて居る。上流の鋭く屈曲したS字狀は此の横谷に當り、中流以下の大屈曲は隴山と山西山地とに妨げられた結果である。

三

黄河流域は支那文化の發源地であつて、夏殷周三代の都は渭汾洛三水と黄河との合流點附近に在つたから、其流域に關する地理は上古から可なり明瞭で、渭水の水源たる鳥鼠山及ひ其裏側の蘭州の西で、湟水（大通河）の合流點に近い積石山などの早く知れて、河水が此邊から流れ出るのも知れて居たのは怪むに足らぬ。禹が積石から河水を導いて龍門（西河に在る）に至つたといふ禹貢の文は此の上古に知れた所を擧げたものである。然るに今の尚書禹貢なるものは、戰國に至つて蜀が秦國に屬してから後に成つたと考へられ、山海經の五藏山經五卷は却つて是よりも古く、恐らくは東周に於て春秋時代頃に出來たと思はれる（此意見は藝文誌上に數回に渉つて述べたから省略する）に關らず、黄河水源に關して面白い事實が見へる。北山經に敦薨の山から敦薨の水が出て、西流して泑澤に注ぎ、昆侖の東北隅から出るもので、實に惟れ河源であると見え、又た西山經に不周の山から東に泑澤を望み、是が河水の潛む所で、其原渾渾泡泡たりといひ、又た同經の昆侖の丘には河水が出て南に流れ、東無達に注ぐといひ、又た同經の積石の山には其下に石門があつて、河水は其下を通つて西流すると見えて居る。此の敦薨水が南山（崑崙山脈の北部）から流れ出て、沙州敦煌の傍を

流れ、西流して漢書地理志に見えた冥澤に注ぐ所の今の黨河であることは殆んど疑ない。是から考へると昆侖丘から河水が出て、東に向つて無達に注ぐといふのは、黄河の一般的記載で、無達といふの恐らくは山西の北部に在つて、北河から南流して西河となる近傍の無窮と同一の地かと想はれる。無窮なる地名は史記趙世家に武靈王が中山から西北に向つて往つた處で、「王北略二中山之地一、遂之二代北一、至二無窮一、西至二河、登二黄華之上一」といふ文から其位置は略ぼ明かである。

黄河の水源の崑崙に在ることが此頃一般に信ぜられたので、爾雅の「河出二崑崙一、所レ渠幷千七百一川、色黄、百里一小曲、千里一曲一直」、とある。漢武帝が張騫鑿空の遠征によつて、塔里木河が于闐國の南山から流れ出て、恰かも黄河の如く東流する大河で、鹽澤即ち羅布泊に流れ込むことを知つた時に、古地圖に見えた崑崙の位置を遙かに西方に推し移したのも、此の傳説に基いた結果に外ならぬ。是に於て黄河は塔里木河が一度鹽澤に潜み再び伏流して積石から出て中國の河となるといふ伏流説が出たのである。然れども實は未だ此の西方の地理が知れなんだ戰國以前に、敦薨水が伏流して積石から流出するといふ第一の伏流説が既に存在して居たのである。

北魏の酈道元が水經注を作る時に此の第一の伏流説と第二の伏流説を混同して、黄河上流の水系を記載し、種々に牽强した解釋を下した爲めに、明かに地理上智識の狹かつた上古の伏流説の存在を知ることが出來ぬ樣になつたのは太だ遺憾である。此の誤謬は恰かもニール河源問題に東流するニゲル河を誤認したことがあつたのと似たものである。(此の酈氏の誤謬は藝文第六年第一號に指摘

して、第一伏流説を詳かに述べて置いた)。

四

黄河水源地方は唐の長慶元年(八二一年)に劉元鼎が西蕃盟會使として西藏に旅行した時に通過したので、其報告が舊唐書及び新書唐吐蕃傳に載せてある。兩文互に詳略出入があるから左に並べ載せる。

是時元鼎往來渡二黄河上流一、在二洪濟橋西南二千餘里一、其水極爲二淺狹一、春可二揭涉一、秋夏則以レ船渡、其南三百餘里有二三山一、山形如レ鏃、河源在二其間一、水甚清洽、流經二諸水一、色遂赤、續爲二諸水所一レ注、漸既黄濁、又其源西去二蕃之列館一、約四驛、每驛約二百餘里、東北去二莫賀延磧尾一、濶五十里、向南漸狹小、〔舊唐書卷百九十六下〕

元鼎蹤二湟水一、至二龍泉谷一、西北望二殺胡川一、哥舒翰故壁多在、湟水出二蒙谷一、抵二龍泉一與レ河合、河之上流、緜二洪濟梁一、西南行二千里、水益狹、春可レ涉、秋夏乃勝レ舟、其南三百里、三山中高而四下、曰二紫山一、直二大羊同國一、古所レ謂崑崙者也、虜曰二悶摩黎山一、東距二長安一五千里、河源二其間一、流澄緩下、稍合二衆流一、色赤、行益遠、它水幷注則濁、故世舉謂二西戎地一曰二河湟一、河源東北直二莫賀延磧尾一、殆五百里磧廣五十里、北自二沙州一、西南入二吐谷渾一、寖狹、故號二磧尾一、隱測二其地一、蓋劍南之西、元鼎所二經見一、大略如レ此、〔唐書卷二百十六下〕

此の旅行の線路は蘭州から湟河を溯つて西寧に至り、其から拉薩街道を西南に進んで、鄂淩湖(オリンノル)の下流で黄河上流を渡つたので、其の水源が更に西に在ることを聞いたことゝ察せられる。莫賀延磧なる地名は新唐書の記事から推せば柴達木窪地

のことで、或は其の東部の巴顏喀拉を莫延賀と傳聞したのが誤つて其の下二字が轉倒したものかと想はれる。然れども此の紀行の文は轉載される際に種々の誤謬が加はつたらしく、湟水が龍泉に抵つて河と合すといふが如き、蘭州々治皐蘭縣の五眼龍泉と碾伯縣の龍泉谷との両者を混同したのは其一例で、從つて正確な記載とは見られぬ。劉元鼎其人の報告に既に誤謬があつたかも知れぬが、舊新両者の出入から考うれば其缺點は多くは筆削宜しきを失つた爲めであらう。

此の如き缺點はあるが、積石山以上の水源を確かに踏んだ最初の旅行家が劉元鼎の一行であることは事實である。元史地理志河源附錄も張騫と此人(元史薛元鼎に作るの可否は定められぬが姑く、舊新両唐書共に劉に作つたのに從つて置く)を擧げたのは當を得たものである。其水源に於て水の色が赤く、後に諸水を容れて黄濁するといふ觀察は特に面白く、崑崙から赤水又は丹水が流れ出るといふ古代の傳說が眞實であつたことを證明し又た河源が出るとした崑崙の古代の想像的位置も疑なく定まつた。

五

元が歐亞両洲に跨つて大帝國を興した時代は、漢唐の如く此の水源地方に異民族が割據して旅行者が危險を感ずることがなく、從つて其探檢も容易となつて、至元十七年(一二八〇年)都實が招討使として河源探究の命を受け、河州から殺馬關を出て南岸から西に向つて往つた四月に亙つた旅行で水源に達することを得た。都實の觀た結果は圖及び報告に纏めて提出されたが、翰林學士潘昂霄なる人が都實の弟潤潤から其材料を得て撰した河源志、及び元代地理家の巨擘たる朱思本が八里吉

思の家に藏した梵字圖書を得て譯したものがあつた。元史編纂者は此の兩書の概要を抄錄して河源附錄として地理志の末に揭げ、潘氏の記した所と異つた朱思本の文を割注として居る。

至元十七年命二都實一、爲二招討使一、佩二金虎符一、往求二河源一、都實既受レ命、是歲至二河州一、州之東六十里、有二寧河驛一、驛西南六十里有レ山、曰二殺馬關一、林麓穹隘、舉レ足浸高、行一日至レ巔、西去愈高、四閱レ月始抵二河源一、是冬還報、幷圖二其城傳位置一、以聞、

按河源在二土蕃朶甘思西鄙一、有二泉百餘泓一、沮洳散渙、弗レ可二逼視一、方可二七八十里一、履二高山一下瞰、燦若二列星一、以レ故名二火敦腦兒一、火敦譯言二星宿一也、〔思本曰河源在二中州西南一、直二四川馬湖蠻部之正西、三千餘里、雲南麗江宣撫司之西北、一千五百餘里、帝師撒思加地之西南、二千餘里一、水從レ地涌出如レ井、其井百餘、東北流百餘里、匯爲二大澤一、曰二火敦腦兒一、〕

羣流奔輳、近五七里、匯二二巨澤一、名二阿剌腦兒一、自レ西而東、連屬吞噬、行一日、迤邐東爲成レ川、號二赤賓河一、又二三日、水西南來、名二亦里出一、與二赤賓河一合、又三四日、水南來、名二忽闌一、又水東南來、名二也里求一、合流入二赤賓一、其流浸大、始名二黃河一、然水猶清、人可レ涉、〔思本曰忽闌河源、出レ自二南山一、其地大山峻嶺、綿亙千里、水流五百餘里、注二也里出河一、也里出河源、亦出レ自二南山一、西北流五百餘里、始與二黃河一合、〕

又一二日、岐爲二八九股一、名二也孫斡論一、譯言二九渡一、通廣五七里、可レ度レ馬、又四五日、水渾濁土人抱二革囊一、騎過レ之、聚落糾二木幹一象

舟、傳二髦革一以濟、僅容二兩人一、自レ是兩山峽束、廣可一里、二里或半里、其深叵レ測、朶甘思東北有二大雪山一、名二亦耳麻不莫剌一、其山最高、譯言二騰乞里塔一、即崑崙也、山腹至レ頂皆雪、冬夏不レ消、土人言、遠年成レ氷時、六月見レ之、自二八九股水一、至二崑崙一行二十里、(思本曰自二渾水一東北流二百餘里、與二懷里火禿河一合、懷里火禿河、源自二南山一、水正北偏西流、八百餘里、與二黃河一合、又東北流、一百餘里、過二郎麻哈地一、又正北流一百餘里、乃折而西北流、二百餘里、又折而正北流、一百餘里、又折而東流、過二崑崙山下一、番名二亦耳麻不剌一、其山高峻非常、山麓綿亙、五百餘里、河隨二山足一東流、過二撒思加、闊即、闊提地一)

河行二崑崙南一半日、又四五日、至二地名二闊即及闊提一、二地相屬、又三日地名二哈剌別里赤兒一、四達之衝也、多二寇盜一、有二官兵一鎮レ之、近北二日、河水過レ之(思本曰河過二闊提一與二亦西八思今河一合、亦西八思今河源、自二鐵豹嶺之北一、正北流、凡五百餘里、而與黃河合)崑崙以西人簡少、多處二山南一、山皆不二穹峻一、水亦散漫、獸有二髦牛、野馬、狼狍、羝羊之類一、其東山益高、地益漸下、岸狹隘、有下狐可二一躍而越一之處上行五六日、有レ水西南來、名二納隣哈剌一、譯言二細黃河也、(以下朱思本の文を略す)

又兩日、水南來、名二乞兒、馬出一、二水合流入レ河、河水北行、轉西流、過二崑崙北一、一向東北流、約行半月、至二貴德州一地名二必赤里一、始有二州治官府一、州隸二吐蕃等處宣慰司一、司治二河州一、又四五日、至二積石州一、即禹貢積石、五日至二河州安鄉關一、一日至二打羅坑一、東北行

一日、洮河南來入レ河、又一日至二蘭州一、過二北ト渡一、至二鳴沙一、河過二應吉里州一、正東一行、至二寧夏府南一、東行即東勝州、隷二大同路一、自二發源一至二漢地一、南北溯溪、細流傍貫、莫レ知二紀極一、山皆草石、至二積石一、方林水暢茂、世言二河九折一、彼地有二二折一、蓋乞兒、馬出及貴德、必赤里也、

此の紀程頗る詳密で、星宿海から起つて鄂稜湖（即ち阿剌腦兒）となり、流出してコズロフ氏のマチュ河（赤賓河）となり、是より東南に流れてコズロフ氏のセルチュ（亦里出又は也里求）を容れて、亦耳麻不剌山（玉泉 Elmass-bulak の義ならん、譯言騰乞里塔といふ是は天山の義なり）の南麓を廻り、峽谷の間を流れ、闊即（コズロフ氏の地圖に Ngolok とあれば、即は恐らくは郎字の誤ならん）、及び闊提（コズロフ氏のコテ）の地を東流して北に向ひ、又た西北に流れて其山麓を廻り、北に轉じて貴德州に出るまでの間の地勢及び重な支流を擧げて居る。特に朱思本の觀た梵字圖書なるものは餘程精密なものであつたらしい。

此の探檢は千餘年間支那に行はれた河源伏流說を打破して、其の眞源を確定したもので、支那地理上に最も重大なる功績であつた。

六

黄河の水源地に關する明代の古圖中、廣輿圖は建文圖と共に朱氏の當時梵字圖に據つたものなるべきも、其詳ならぬのは遺憾である。今支邦に行はるゝ地圖は遙かに後れて清朝に入つて康熙帝の命に成つたもので、齊召南の水道提綱に對する清一統輿圖南一二三卷に見えたものである。此の地域の測量は西藏圖を十八省圖と同じ樣式に作製せしめんとした康熙帝の發意によつて出來たので、

其由來が耶蘇教師レヂスの手錄からデュアルドの支那帝國誌の末に抄出された左の記事に詳かである。

西藏の喇嘛教徒が黃紅二派に分れて紛爭した際に、清朝から其鎭撫の爲めに派遣した使節の一行に命じて、其地圖を描かしめて、康熙五十年(一七一一年)に其稿圖をレヂスに渡して輯製せしめんとした。然るに位置が天測に依て定められて居らず、又た距離が測られて居らなんだので、正確なものを編纂し能はぬことを上奏した。其處で康熙帝は喇嘛二人に數字を教へて、之に命じて西藏全國を測量せしめることにして、康熙五十六年(一七一七年)に再び耶蘇教師に其稿圖を渡して作製せしめたのである。此の如く元の河源地圖と同じく再び喇嘛僧徒の手に測量されたのは、第十九世紀後半までと同じく外人の旅行が困難で、喇嘛僧徒のみ何處でも容易に旅行し得た國情の然らしめた結果である。現に東西兩洋に行はれて居る圖は此の踏査に基いたもので、西洋探檢の測圖によつて部分的に次第に精密なものになりつゝあつても全體は尙ほ當時の地圖に依つて居る。

黃河水源問題は此の踏査によつて一歩を進めて火敦腦兒から西三百支那里の巴顏喀喇山の東麓に發源する阿爾坦河に追跡されたことは、齊召南の水道提綱(卷五)に載せた通りである。此水源に當つて古爾板蒙袞拖羅山があつて、三峯相並んで居る。齊氏が此の事實から巴顏喀喇山即ち劉元鼎の紫山と看做した說が當つて居るものとすれば唐代に既に眞の水源まで知れた筈であるが此の點は疑はしい。此の紫山が又た枯爾坤の名があるから崑崙は是からの轉音であるとする齊氏の說に至つては更に疑はしい。從つて亦耳麻不剌山(齊氏阿木你

麻纏母孫大雪山）を崑崙に非ずして積石山なりとする事は一統圖にも行はれて居るが、尤も當を得ない、我々は矢張り元都實の紀行に見えた湟河の合流點に近い積石山が古代に知れたものとする。

七

最近歐洲探檢家が中亞に入り込んでから此の地方にも亦た數多の踏査者を見た。其先登は印度政府から派遣されたプンヂット、エー、ケー即ちクリシュナ（一八七九、八二年）で、これに次いでプジェワルスキー（一八八四、五年）、ロッキル（一八八九年）、デュトルイユ、ド、ラン（一八九四年）、コズロフ（一九〇〇年）等續々査淩鄂淩兩湖畔を見舞つて居る。コズロフ氏に從へば兩湖は（海拔一三、九〇〇及一三、八九〇尺）で、其周邊の氷河を戴いた高山は海拔一六、〇〇尺内外の峯巒で、海拔は大でも湖面から二千尺内外の比較高度に過ぎぬ中亞高地の著しい特色を有して居る。是から以下の屈曲部は近年追跡した探檢家がなく、フッテレル（一八九六年）が其東西流する部分を通過したのと、プシェワルスキ（一八七九、八〇年）、グルム、グルジマイロ（一八九〇年）が更に北部に來たのみで、此の地方へは青海へ入り込んだ多數探檢家の一部が足を向けたに過ぎぬ。從つて此等の探檢家が來た後も、水系の大綱は齊氏の記載の詳密に加ふる所はない。蓋し齊氏は康熙年間の探檢者の旅行記に據つたものと想はれ、一統輿圖及びデュ、アルドの附圖に比較して遙かに詳細に渉つて居る。

八

以上述べた所を概括すれば、黄河水源に關して漢以前に敦薨水（即ち黨水）の溺澤（即ち冥澤、今のカラノル）に流れ込んで流出口のないのを認めて黄河の上流とし、是から伏流して積石に至つて

再び出て黄河となるといふ説があつて漢張騫の征西後に漢書地理誌に見ゆる塔里木河が鹽澤に入つて再び積石に出るといふ第二伏流説に變形した。唐に及んで劉元鼎の水源地方の旅行があり、元世祖の時に都實の探檢があつて星宿海に至つて、初めて水源の位置が知れ、又た積石に至る間の屈曲が追跡されて此の伏流説の誤謬たることが明かとなつた。清朝に及んで更に星宿海以上の水源を發見し、又た詳密な地圖及び水誌に記載されることになつたのである。